

王朝和歌における恋歌の表現

— 歌語「涙川」の表現とその展開 —

後藤 愛

一 はじめに

王朝和歌において、人々は心に抱くさまざまな思いを外界の風物に託して詠出した。紀貫之が『古今集』仮名序で「やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて言ひ出せるなり」と言い得た通りである。その中で、イメージが豊かであることばや情趣に富むことば、藤原定家の語を借りれば「幽玄の詞」が、詩的表現として多くの人々に受け入れられ、彼らの感性によって更に磨かれていった。

「涙川」もまた、そのような詩的表現の一つである。「涙川」はその実在すら明らかになつていないが、歌び

との思いを映し出す歌語として、王朝和歌の恋歌において多く用いられてきた。筆者が初めてこの歌語を耳にしたとき、人々の奥底深い感情から溢れ出る「涙」と、古代から人々と深く関わつてきた「川」とを見事に融合させたこの表現に驚きと感動を覚えた。そして、王朝和歌の歌びとにとつて「涙川」はどのような表現であつたのか、王朝和歌においてどのように展開していったのかということに関心を抱いた。

本稿では、王朝和歌における「涙川」歌を縦断的に分析するために、八代集の「涙川」歌を対象として考察する。八代集とは平安前期から鎌倉初期までに撰進された勅撰和歌集であり、王朝和歌の規範として位置付けられている。また、八代集には五十九首の「涙川」歌が収録されており、歌集によつて収録歌数や配列に違いがみられる。したがつて、八代集は王朝和歌における「涙川」の展開を考察するのに適しているといえよう。

なお、本稿では「涙川」歌に詠み込まれた縁語に着目して考察していく。縁語とは、一首のうちのうちのある語に、意味的または発音上密接な関係のある語を用いる手法で、『古今集』及び『古今集』以後好んで用いられた修辭の一つである。八代集の「涙川」歌にも縁語が巧みに用いられており、「涙川」に対する詠者の意識を考える手掛

かりになりそうである。したがって、次章で「涙川」歌を詳細に分析する際に、縁語を軸として分析する。その分析を踏まえて、王朝和歌における「涙川」の表現とその展開について考察する。

二 「涙川」の表現

「涙川」がどのような表現であるのか考察するにあたり、まず王朝和歌において「涙」と「川」がどのように捉えられ、和歌に詠まれていたのか、「涙」と「川」それぞれの和歌表現としての傾向を明らかにしておきたい。

まず、秋山虔編『王朝語辞典』³において「涙」は、「苦しい恋の涙、大切な人との死別・生別に際する涙、感涙、あるいは、万感胸にせまる涙など、人々はさまざまな涙を流す。和歌においては量において誇張され、川・滝・海・雨・氷・氷柱などの自然現象にたとえて形象化されることが多い。とくに、川にたとえる歌は多々見られ、「涙川」（伊勢の歌枕ともいう）も誕生した。」と位置付けられた上で、さらに、自身の感情伝達手段としての有効性も指摘されている。また、『歌ことは歌枕大辞典』⁴では、部立との関わりについての言及がみられ、「恋」を基軸として「涙」が詠まれていると理解できる。

かたや「川」について、先掲した二つの辞典⁵の記述から注目すべきは、『万葉集』の時代から平安時代にかけて和歌における川の意識が変化していることである。上代において川は旅人の詠むべき要所であったという記述から、川の歌は囑目によるものが多く、ある程度の即興性をもって歌われていたと考えてよいだろう。つづく平安時代には、川の地名に対する意識が高まったことで、川の名が歌ことばとして自立し、観念化されていった。それに伴い、実際の囑目によるものではなく、詠作意図に合わせて川にさまざまな意味を付与して詠んだ歌が増えたのではないか。そして、その中で生まれた歌ことばが「涙川」である。また、『王朝語辞典』では、「涙川」は川の観念化と表裏してあらわれたものであると指摘している。

ならば、そのような経緯で生まれたと考えられる「涙川」はどのような表現であるのか。先掲『歌ことは歌枕大辞典』⁶から、「涙川」は涙を表現する歌語であり、国名伊勢に関わる歌語と推察されている。ただし、伊勢国と関連させて詠まれる用例が少ないことから、王朝和歌において「涙川」は涙を表現する歌語として定着していたと理解するのが穏当であろう。また、「涙川」で表現される「涙」は一般的に恋歌の「涙」であると言える。

このような傾向は八代集の「涙川」歌でも見受けられる（左表参照）。

45	6	3	2	1	1	1
恋	雑	傷	別	中	名	物
哀	離	秋	冬	物	名	物
總	計					
59						

八代集には五十九首の「涙川」歌が収録されているが、その内の四十五首が恋部に収録されており、恋歌の割合が非常に高いことが分かる。しかし、「涙川」が恋歌の表現であるとするならば、なぜ五十九首中の十四首は恋部以外の部立に収録されているのか。これには、歌集による「涙川」の捉え方の違いや撰者の歌集に対する編纂意識が関わってくるだろう。また、それぞれの歌に詠まれている「涙川」の表現と歌の作成状況の分析を踏まえた解釈が求められよう。したがって「涙川」歌を恋部と恋部以外に分類し、歌集ごとに考察していく。

三 恋部の「涙川」歌

恋部に収録されている「涙川」歌四十五首を分析して

いくと、歌や歌集によって「涙川」の詠まれ方に違いが見て取れる。したがって、ここでは「涙川」の詠まれ方に注目し、「涙川」の展開を明らかにする。なお、既に述べたように修辭の一つである縁語を軸として「涙川」の分析を進めていく。八代集全ての用例を組上に載せるのは紙幅の関係で困難であるため、特徴の明瞭な数首を取り上げて「涙川」の展開を明らかにする。

まず、『古今集』の次の二首を取り上げる。

つれづれのながめに増さる涙川袖のみ濡れて逢ふ
よしもなし（六一七・敏行朝臣）

当歌では「涙」に関わる縁語「濡る」が用いられている。「袖のみ濡れて」という表現は恋歌の中で涙を流す常套的な手法であり、当時恋歌で多く用いられていた。また、当歌に対する返歌にも「涙川」が詠まれている。

浅みこそ袖は漬つらめ涙川身さへ流ると聞かばた
のまむ（六一八・業平朝臣）

「涙」に関わる縁語としては「漬つ」が用いられており、これも袖が濡れる状況を誇張して表現していると言える。次に『後撰集』では、

わび人のそほづてふなる涙川下り立ちてこそ濡れ
渡りけれ（六一〇・橘敏仲）

があり、「そほつ」と「濡れ（渡り）」が用いられている。

「そほつ」は「濡る」と類義関係の語であり、「涙」に関する縁語といえる。

このようにみると、『後撰集』までの「涙川」歌には「涙」に関わる縁語が多く取り上げられていることが分かる。特に「濡る」「漬つ」「そほつ」など、袖に流れる涙を表現する語が多く見られる。

つづく『拾遺集』以降の歌は次のような傾向にある。
涙川底の水屑と成り果てて恋しき瀬に流れこそすれ(『拾遺集』八七七・源順)

この歌では「川」に関わる縁語「水屑」「瀬」が用いられている。「水屑」は八代集の「涙川」歌では『拾遺集』が初出となる。また、

涙川袖のあせきも朽ち果てて淀むかたなき恋もするかな(『金葉集』三七七・皇后宮右衛門佐)
には川に関わる縁語「あせき(堰)」「淀む」が用いられている。「淀む」は八代集の「涙川」歌では『金葉集』が初出となる。そして、

堰きかねる涙の川のはやき瀬は逢ふより他の柵ぞなき(『千載集』七二三・前右京権大夫頼政)

にも川に関わる縁語「堰く」「瀬」「柵」が用いられている。「堰く」は『後撰集』から『新古今集』まで受け継がれており、「柵」は『拾遺集』から『新古今集』まで受け

継がれている。

先掲「涙川底の水屑と成り果てて」(『拾遺集』八七七)で用いられている「流れ」は、涙が自然と流れる「泣かれ」と、川の「流れ」の掛詞であるため、「涙」と「川」の双方に関する縁語であるといえる。しかし、『拾遺集』以降も受け継がれる縁語は、「流れ」を除いて全て川に関する縁語に限られており、『後撰集』までに認められた「涙」に関する縁語は、「涙川」を詠み込む和歌にはあらずでない。また、『拾遺集』以降に初めて登場する縁語も、全て川に関する縁語である。

このような結果は、「涙」に関する縁語は『後撰集』まで多く用いられていたのに対して、『拾遺集』以降はほとんど継承されず、「川」に関する縁語が中心に取り上げられるという展開を示している。したがって、『後撰集』までの歌語「涙川」の表現は「涙」に力点が置かれているのに対して、『拾遺集』以降では、その力点が「川」へと緩やかに変化していったと捉えられる。

四 恋部以外の「涙川」歌

先述の通り、八代集には恋部以外の部立に収録されている「涙川」歌が十四首ある。部立の分類は次の通りで

ある。

古今集	物名	1
後撰集	離別	2
	秋冬	1
拾遺集	哀傷	1
後拾遺集	雑	1
	哀傷	2
金葉集	雑	2
詞花集	雑	1
千載集	雑	2
総計		14

表から明らかなように、『古今集』では物名、『金葉集』では雑など、歌集によって採録部立に違いが見られる。したがって歌集ごとに分析し、八代集における「涙川」の展開を明らかにする。なお、恋部と同様に、特徴的な作品を取り上げて考察をすすめる。

まず、『古今集』に収録されている物名歌である。

流れいづる方だに見えぬ涙川沖ひむ時や底は知られむ
(四六六・都良香)

当歌は『延五記』の「心は恋なり」という記述からして恋情を主題に据えていると理解できる。しかし、「おき火」を「沖ひむ」の中に詠み込んだ技巧が評価された

めに、恋歌でありながら物名として位置付けられたと考えられる。また、『後撰集』の季節歌二首(三三二、四九四)も恋情を詠んでいると判断できるが、季節部に恋雑歌を多く用い、同一主題を分散するという『後撰集』撰者の意図により、季節部に収録されたと解するのが穏当であろう。そして、同歌集離別部の二首(一三二七、一三三四)も恋情を詠った歌であるが、状況が旅立ちの別れであるために離別部に収録されたといえよう。

つまり、『後撰集』までの恋部以外の「涙川」歌は恋情を前面に示す作品であり、撰者の編纂意識によって恋部以外に収録されたと考えられる。したがって、『古今集』『後撰集』の「涙川」歌は全て恋情を強く表現する作品であると理解できる。

かたや『拾遺集』以降の「涙川」歌九首には、一家の沈淪を嘆く歌(『後拾遺集』九八四)や流罪を悲しむ歌(『千載集』一一一八)などをはじめとして、恋情を含まない歌が占めていることが明らかになった。このような結果から、『後撰集』時代までの「涙川」は恋情に特化した表現として理解されて詠まれてきたが、『拾遺集』以降は恋情を含まない歌にも詠み込まれるようになったと位置付けられるのではないか。

このような展開を示す作品九首に対して、恋部の「涙

「川」歌と同様に縁語を軸として分析を行った。まず、『後拾遺集』の、

君をだに浮かべてしがな **涙川**沈む中にも淵瀬あり
やと（九八四・雑部・藤原元真）

では、「浮かぶ」「沈む」「淵瀬」が川に関する縁語として詠み込まれている。また、

流れても **逢瀬**ありけり **涙川**消えにし泡を何にたとへん（『金葉集』六一二・雑部・藤原知信）

では、涙と川の双方に関わる縁語「流れ」と、川に関わる縁語「逢瀬」「泡」が用いられている。そして、

この瀬にも沈むと聞くは **涙川**流れしよりもなほまさりけり（『千載集』一一一八・雑部・前左兵衛督惟方）

にも、涙と川の双方に関わる縁語「流れ」と、川に関わる縁語「瀬」「沈む」が用いられている。

このように、『拾遺集』以降の「涙川」歌では「川」に関する縁語がより積極的に詠み込まれていることが分かる。このような分析から、「涙川」は「川」の縁語と共に詠まれることが多くなつたために、表現の力点が「悲恋の涙」から「川」へと変化したのではないか。その結果、詠作意図に合わせて多様に詠まれる「川」の特色が引き出され、「涙川」が恋歌以外でも用いられうる素材へ

と展開していったのではないか。

五 おわりに

「涙川」は、川の観念化と表裏してあらわれた歌語である。恋を基軸として詠まれる「涙」と、詠作意図に合わせて多様に詠まれる「川」が渾然一体となつたこの歌語は、王朝和歌において「悲恋の涙」の表現として受け入れられた。しかし、時代を経るにしたがつて「涙川」に対する意識の変化が縁語の用法として顕在化してきているのではあるまいか。

『後撰集』以前、「涙川」は「涙」の側面に力点が置かれ、「悲恋の涙」として恋歌で多用されてきた。恋部以外の「涙川」歌も撰者の編纂意識によつて他部に配列されているが、全て恋情を詠んだ歌である。そして、恋部の「涙川」歌では「袖濡る」や「袖漬つ」など「涙」に関する縁語が多く登場する。しかし『拾遺集』以後、「涙」に関する縁語はほとんど継承されず、「川」に関する縁語が継承されたり、新たに生まれたりする。そして、恋情を含まない歌にも「涙川」が積極的に詠まれるようになり、それらには「川」に関する縁語が巧みに用いられる。したがって、「涙川」はしだいに「川」の側面に力点が置

かれるようになったと理解できる。

このように「涙川」に対する意識が変化した要因の一つとして縁語の習熟が挙げられよう。冒頭でも述べたように、縁語は『古今集』以後好んで用いられ、複雑巧緻な発達を遂げて新古今調において絶頂に達したといわれている。王朝和歌において発達した縁語は、「涙川」歌でも積極的に取り入れられ、それに伴って縁の深い語を多く持つ「川」が縁語の核になる語として注目され、表現の力点がしだいに「涙」から「川」へと変化したのである。

本来「悲恋の涙」を象徴する表現であった「涙川」が「川」の縁語と共に詠まれることにより、「涙川」から川の表象性が引き出され、表現により広がりが生まれた。「たぎつ瀬」と共に詠むことで激しい恋情を表したり、『新古今集』一三五〇）、「沈む」と共に詠むことで沈淪した状況を表したりするなど（『千載集』一一一八）、共に詠み込む縁語によって恋情だけではなく詠者の嘆かわしい状況や心情をも表現できるようになったのである。その結果、そもそも恋歌の表現であった「涙川」が、恋情を含まない歌にも用いられ得る素材として表現の幅を拡大していったといえよう。

このような意識の変化を経て、「涙川」の表現性は益々

豊かになった。恋部においても単に涙を流すだけでなく、川によせて自身の願いや状況を詠む歌の割合が高くなっていたのである。

川は詠作意図に合わせてさまざまな意味を付与されるという特徴をもつため、恋歌においても「悲恋の涙」に留まらず、詠者の願いや思いが詠み込みやすくなったと考えられる。したがって「涙川」は、表現の比重が「涙」から「川」へと変化したことで、王朝歌人の涙だけでなく多様な心を映し出す歌語として洗練されていったといえよう。

【注】

1 八代集には「涙川」とほぼ同様の表現である「涙の川」を用いた歌が十四首みられるが、「涙川」と「涙の川」の意味的な差異はないと判断できる。

2 日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典 第一巻』（岩波書店、一九八三）

3 秋山虔『王朝語辞典』（「涙」鈴木宏子）（東京大学出版会、二〇〇〇）

4 久保田淳、馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』（「涙」林達也）（角川書店、一九九九）

5 注2の文献（「川」鉄野昌弘）と注3の文献（「川」

安井重雄) 参照。

⁶ 注3の文献(「涙川」依田 泰) 参照。

⁷ 小島憲之・新井栄蔵校注『新日本古典文学大系5 古今和歌集』(岩波書店、一九八九) 参照。

⁸ 犬養廉編『和歌大辞典』(「後撰和歌集」杉谷寿郎)(明治書院、一九八六) 参照。

本文中で引用した和歌は全て『新日本古典文学大系』(岩波書店)に拠る。

(ごとう あい 春富中学校教諭)